

化などなど。この国の根幹にかかわる改革課題が目白押しです。

衆参のねじれ状態の中で、政権与党の足を引っ張るのは簡単です。しかし、今や、ねじれの状態だからこそ、党利党略にとらわれるのではなく、いいものはいい、悪いものは悪いと、国会議員が信念に基づいて判断し行動していかねばならないのではないのでしょうか。

さいとう健は、今回の本格的な衆参のねじれは、日本の政治が、国会で政策を決めてゆく、真の意味での政治主導を実現するチャンスと捕らえております。なぜならば、衆参のねじれの下では、与党と野党が政策のよしあしを国会で議論していかねければ、何事も決まらなからずです。

誤解を恐れずにいえば、これまで、政府の役人が予算や法律の原案を策定し、与党がよしとしたら、あとは、国会を通すテクニックが問われるとい



良識ある政治(家)を望む声が高まっています

うのが、今までの国会の実態でした。今回の衆参のねじれは、そういう国会のあり方を大きく変えるチャンスなんです。

そのためには、野党の見識がより問われることとなります。何でも反対して足を引っ張るのではなくて、日本のためにやらねばならないことはきちんと議論して賛成していく、そして、おかしなことには断固反対してゆく、そういう姿勢を国民の皆様に見ていただくこそこそが、自民党が政権に復帰する、遠いようで近い道だと、さいとう健は確信しております。

また、一人ひとりの国会議員も、議員を長く続けることができなくてもいいから、何か真に国家に貢献できる仕事ができるればそれでいい、そういうタイプの政治家が続々と登場してこなければなりません。そういう政治家こそが、政党のしがらみにとらわれずに信念に基づいて行動できるわけですから。少なくとも、私自身は、そういう国会議員であるとうと固く決心しております。

この衆参のねじれにどう対応してゆくかが、これからの政治のあり方を決定します。さいとう健は、ねじれの中で、日本の政治が少しでも前進していくように努力していきたいと思っております。

みなさんのご意見をおきかせいただければ幸いです。

平成二十二年八月一日

さいとう健



様々な専門家を招いての公開シンポジウムを開催中(6月は教育評論家の長田百合子氏による講演)

コラム 平成の蘭学事始

76年間政権与党にあったオランダの政党「キリスト教民主アピール」は、1994年に政権から転落して以降、再び政権を取り戻すのに8年を要しました。

さいとう健は、その間の同党の苦闘ぶりを詳しく研究いたしました。一言で言えば、政策、組織、そしてリーダーという三つの柱の全てにおいて抜本的改革がない限り、政権は戻ってこないというものでした。



オランダの事情を調査中のさいとう健